

正田篠枝『さんげ』1947年、私家版歌集

正田篠枝（しょうだ しのえ）は1945年8月6日、35歳のとき、爆心地より1.7キロの広島市内平野町の自宅で被爆。満53歳のとき、県立広島病院で原爆症による乳がんと診断され、2年後の1965年6月15日、自宅で死去。54歳。19歳のとき、短歌誌に投稿を始め、短歌会「晩鐘」主宰の山隅衛、「短歌至上主義」主宰の杉浦翠子に師事した。

この私家版歌集は占領軍民間情報局の厳しい監視・検閲の目をくぐり、広島刑務所印策局でひそかに印刷・発行された。

篠枝はこの歌集の書名の由来を後年（1962年）刊行した、『耳鳴り—被爆歌人の手記』の序文のなかで次のように記している。

「この〔原爆の〕悲惨を体験し、何故、こういう目に会わねばならないのであろうかについて、他を責むるのみではなく、責むるべきもののなかには、己れもあるのだと思いました。そうして、不思議に生き残って、病苦に悩まなければならない、自分を省みて懺悔せずにおれないのでありました。それで『さんげ』と、題をつけました。」

篠枝は原爆症で苦しみながらも、1959年、「原水爆禁止広島母の会」の発起人となり、1961年に創刊された同会の機関紙「ひろしまの河」にも短歌やエッセイを寄稿した。また、亡くなる2ヶ月前の1965年4月に、篠枝が取材に応じたNHKテレビ番組「耳鳴り—ある被爆者の記録」が放映された。

死ぬ時を強要されし同胞の魂にたむけん悲嘆の日記

（この歌は本歌集の扉の見返しに描かれた原爆ドームの下に添えられた篠枝自作の短歌である。）

炎なかくぐりぬけきて川に浮く死骸に乗つかり夜の明けを待つ

ズロースもつけず黒焦の人は女（をみな）か乳房たらして泣きわめき行く

筏木の如くに浮かぶ死骸を竿に鉤をつけプスツとさしぬ

酒あふり酒あふりて死骸焼く男のまなこ涙に光る

可憐なる学徒はいとし瀕死のきはに名前を呼べばハイッと答へぬ

大き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨あつまれり

（この歌は広島平和記念公園に設置された「教師と子どもの碑」の台座に刻まれている。）

武器持たぬ我等国民（くにたみ）大懺悔の心を持して深信に生きむ

篠枝が著した上記の『耳鳴り』によると、第2首は義姉が被爆して息を引き取るときにつぶやいて告げたものだという。この義姉は水泳ができなかったので死骸を筏木代わりにその上に

乗っかるうちに段々と流れて死骸といっしょに本川橋の柱にひっかかったところを通りがかった人が助けてくれたという。しかし、この義姉も8月7日に死亡した。

筏木のように浮かぶ死骸に乗っかって生きながらえる——体験者にしか表せない赤裸々な写実は、どのような喜怒哀楽の心境描写や感傷も寄せ付けない切迫感を読者に伝えずはおかない。